

5

泉 彪之助

一・史料・文献は無限であり、どの形を取るにせよ収蔵スペースは有限なので、どうしても所蔵・廃棄の選択が必要になる。

二・史料は、それを研究する研究者の関心と能力によって生きるものであり、なんでもとっておくというわけには行かない。

三・ペリオが敦煌文書を発見したとき、文書の言語をほとんど読めなかった。正倉院宝物・文書の研究が長い期間を費やして行われているように、史料の研究には組織的対応が必要であり、史料の保存は研究の組織化と共に考えるべきことである。

四・現在の日本の経済状況、医史学、図書館学などへの一般の理解の程度から考えると、国立や企業主体の医学博物館・史料館構想は、不可能ではないが困難であろう。

五・寺畑名誉教授の、雑誌は未製本のまま保存することという主張は、気持は分かるが、未製本雑誌がどんなにたくさん紛失するか知っていると賛成できない。

六・むしろ現在警戒すべきは、過度の電子化である。アメ

リカの大学図書館で書籍所蔵を全廃し、電子メディアのみとしているところがあるが、このような愚かな行為には抵抗すべきである。現在の電子メディアの媒体はきわめて脆弱なものであり、保存性も問題がある。これに対し、粘土版文書、死海文書、敦煌文書等がどのように大きな貢献をしたか考えると、文書史料や書籍文献を絶対に手放すべきでない。

七・医史学会の行事として、医学博物館・図書館・史料館等の担当者を招いて、シンポジウムを行ってはどうか。とくに財政問題について、率直な現状を聞きたい。

八・医史学史料が重要なものとして一般に受け入れられるには、医史学研究自身が社会に貢献するものでなければならぬ(決して功利的な意味ではなく)。その点の反省を、医史学会会員の全員がもつべきである。

6

大 滝 紀 雄

私は上記のテーマを二種類に分けて考えている。

第一は医史料関係記事、新聞、雑誌、広告、パンフレット、案内状、手紙、写真など、原則として私自身の所有物